

みず子供養にみる呪術の問題

大 西 昇

(一) みず子供養の一つの試論的分析例

アンケートの質問内容はいささか多岐にわたっているが、ここではその幾つかを取り出して二つのグループに分け、比較対比したいと思う。ただし、どういう規準で分けたかについては後で述べることにして、ここでは触れない。

まず、2の③「供養することにより、どのようなことを願っていますか。」の設問のうち、8「願っていることは特にない。」か9「その他」を選びながらも、1から7の、具体的な願い事をあげた箇所に、少なくとも一つマルを附した例が、347名中43名あり、これを一つの検証例として抜き出すことにする。

なお、43名はすべて女性のため、参照する全体の人数は317名になる。便宜上、43名のグループを[a]とし、全体317名を[A]とする。

$$[A]=317 \quad [a]=43 \quad [a] \subset [A]$$

[a]の43名中、2名のみ8番にマルを付け、43名全員は9番に、「みず子の成仏」ないしそれに類する事柄を記している。

そこで、先に述べた二つのグループの設問について、[a]の、[A]と比較しての特異点を見ていくことにする。

設問Iグループ

2の①あなたは、みず子に対して、どのような気持ちをお持ちですか。

1. 罪を感じる。
2. 罪を感じることもある。

	[a]	[A]
1	95.3	71.9
2	0	12.6

(数字は、それぞれ総数に対するパーセンテージ)

4の⑤あなたにとって供養することは次のどれにあたりますか。

3. 罪のつぐない
5. 心の重荷から軽くなること
7. 気持のやすらぎ
2. 生きていく上での心の支えや慰め

	[a]	[A]
3	95.3	73.8
5	45.2	25.6
7	58.1	46.4
2	44.2	32.5

4の⑥宗教といわれて、どのようなものと思いますか。

- (A)の2, 個人的に心の中に信仰を持つこと
- (B)の6, 自分の罪を知り、それを清めるために神や仏に祈ること
- (B)の7, 悩みや不安から逃れるための弱者のよりどころ
- (B)の2, 自分を高め、道徳的な規準を得ること

	[a]	[A]
A 2	86.0	64.7
B 6	61.9	45.7
〃 7	41.9	24.9
〃 2	30.2	18.6

4の③みず子を供養することは宗教的行為だと思いますか。

1. 思う。
3. 思えるところもある。

2. 思わない。

	[a]	[A]
1+3	50.0	35.9
2	30.2	45.1

4 の ④ 供養は宗教的感情に発するものだと思いますか。

1. 思う。
3. 思えるところもある。
2. 思わない。

	[a]	[A]
1+3	59.5	41.0
2	25.6	35.6

設問 II グループ

2 の ③ 供養することにより、どのようなことを願っていますか。

1. これから先、タタリがないように。
2. 不幸・不運がなくなるように。

	[a]	[A]
1+2	90.5	69.7

4 の ⑥ 宗教といわれて、どのようなものだと思いますか。

[B] の 3, 家内安全, 商売繁昌などを神や仏などに祈願すること。

[B] の 5, 禍や不幸をさけたり, なくしたりするために人間以上の存在, 例えば神や仏などに祈願すること。

	[a]	[A]
3+5	76.2	63.7

以上, 二, 三の例を見たに過ぎないが, [a] は [A] に比して, ([I] のグループに於ては特に, [II] に於ては [I] ほどではないが) パーセンテージが高くなっていることが見られた。

そこで, みず子供養する人達の供養の時の意識に注目してみると, [I] と [II] は,

α . みず子の「成仏」を願う供養そのものが目的である。

β . その他にも目的, 動機がある。

の, α , β の区分に, ほぼ対応していると, 一応考えられる。

すると, こんどは α と β の関係が問われることとなる。[a] の 43 名以外の例では, みず子を供養することと, それ以外の何かを願うということが対立し, 両立しがたいとするものもあるが, 少なくともこの [a] では, 両者は対立しているとする意識は余りみられず, どちらかと言えば, 共存していると言えよう。

この点の意味することなど, この節で取り上げた検証例の分析は, 後にもう一度検討することにしたい。

(二) 呪術について, 二, 三

ここで言う呪術は, 学問的用語としての, magic の訳を考えている。一口に呪術と言っても非常に広い対象領域を持っており, 一般に, 宗教ないし科学との関連の下に考究されている。今は, 宗教と関連して考えられた呪術の, ある一面を取り上げることにしたい。

周知のように, 呪術と宗教の関係, その区分に関しては, 少なくとも Tylor や Frazer 以来, 様々に検討されてきた歴史がある。しかしながら, 今もって区分の明確な普遍的規準が確立されていないのにもかかわらず, 多種多様な学説史を通して変らないことの一つは, 宗教と呪術の区分そのものである, と言える。

例えば, Malinowski は,

“Now what distinguishes magic from religion? We have taken for our starting-point a most definite and tangible distinction: we have defined, within the domain of the sacred, magic as a practical art consisting of acts which are only means to a definite end expected to follow later on; religion as a body of self-contained acts being themselves the ful-

fillment of their purpose.”

と述べている¹⁾。

これは、religion と対比した magic 観であり、マリノフスキイの呪術観の一面であるが、このマリノフスキイの見解を、より明確な図式にしてみると、それは、呪術は手段的であり、宗教は自己目的的である、ということになる。この図式は、様々な呪術学説の中では、比較的共通した見方であると言えよう。例えば、Lucy Mair は、次のように言っている。

“As for the difference between religion and magic, ordinary people have a general idea that they know what it is, and this general idea is correct. It might be epitomized as the difference between *communicating* with beings and *manipulating* forces. Where the idea of communication dominates, the activity is primarily religious; where the idea of manipulation dominates, the activity is primarily magical. Though it is difficult to conceive of communication with forces, there are certainly many attempts at manipulating beings.

One could put this in another way by saying that it is precisely *through* communication that one manipulates personalized beings.”²⁾

これは上の図式の線に近いと言えるだろう。みられるようにルーシー・メアは、宗教と呪術を、communicate と manipulate を標識として区分する方向にある。そして結局は、本来の manipulate の対象は beings ではなく、forces であることは明らかであろう。マリノフスキイは、トロブリアンド諸島の住民の呪術的信仰を、抽象的な形で次のように要約している。

“.....magic is conceived as something essentially human. It is not a force of nature, captured by man through some means and put to his service; it is essentially the assertion of man's intrinsic power over nature.”³⁾

この power over nature というマリノフスキ

イの言葉は、Hegel の呪術の規定 (Magie でなく Zauberei という語が使われているが)、すなわち呪術は人間の die Macht über die Natur であるという規定を思い出させるものである。ヘーゲルは、次のように呪術について、その『宗教哲学講義』で述べている。

“Diese ganz erste Form der Religion ist also das, wofür wir den Namen Zauberei haben. Es ist dies, daß das Geistige Macht über die Natur ist; aber dies Geistige ist noch nicht als Geist, noch nicht in seiner Allgemeinheit, sondern es ist nur das einzelne, zufällige Selbstbewußtsein des Menschen, der sich in seinem Selbstbewußtsein, obwohl er nur bloße Begierde ist, höher weiß als die Natur, der weiß, daß es eine Macht über die Natur ist.”⁴⁾

同様のことを次のようにも言っている。

“Die Zauberei aber ist gerade dies, daß der Mensch nach dieser Natürlichkeit, Begierde die Natur in seiner Gewalt hat.”⁵⁾

あるいは次のようにも言う。

“Die Religion hat ihren Boden nur im Geist. Das Geistige weiß sich als die Macht über das Natürliche,.....”⁶⁾

以上には、ヘーゲルの哲学上の立場（ヘーゲル固有の文脈）があるとしても、呪術の理論としての論理は比較的明確である。ただし、この Natur あるいは Natürlichkeit あるいは das Natürliche が、彼等にのみでなく、我々にとっても大いに問題になるところであるが、今は触れる余裕がない。

とにかくこのヘーゲルの呪術理解が、そのままマリノフスキイに踏襲されているということではないが、ある観点からすれば、両者は同じ線上に居るということは出来る。そしてその一面に、呪術は本質的には技術の一種であり、従って人間の「手段」であるとする発想を持っている。その限りでは、非常に明確である。

しかしながら、こんどは「宗教現象」の現実の生きた形態を対象とし、分析しようとする、事

態はそれほど明確ではなく、その分析からは、多く呪術と宗教の区別のあいまいさが出てくるのである。

そこで、例えば John Beattie は、

“I have intentionally not distinguished between magic and religion.” と言い、

“In fact, however we formulate the distinction, beliefs and practices which are usually called religious often contain a magical element, even in Western cultures.”

と述べてさえいる⁷⁾。

つまり、ある一つの規準を設けて、その規準によって規定しようとしても必ずそれでは不十分な実例に出会うということである。すなわち、両者の区別のあいまいさは、生きた現象を対象とする場合にはどうしても出てくる。従って、ひろく、magico-religious という言葉が使われることになる。

ところが、区別の困難さを言うビーティにしても、呪術と宗教のある種の区別を認め、magic という語を撤回していない。

“But so long as we bear in mind the complexity of the social and cultural situations involved, a broad distinction is possible. We may, with Tylor, distinguish between those kinds of beliefs and practices which involve reference to more or less ‘personalized’ spiritual beings, such as gods, ghosts and spirits, and those which do not, implying instead the notion of an impersonal, unindividualized power.the distinction has much practical convenience, and I adopt it here.”⁸⁾

先にヘーゲルは、呪術を、die erste Form der Religion としたが、die älteste Weise der Religion, ihre wildeste, roheste Form⁹⁾ とも言っている。それでありながら、その後で次のように言うことになる。

“Dies ist nun die erste Form, die noch nicht eigentlich Religion genannt werden kann.”¹⁰⁾

これらのヘーゲルの言い方は、我々から見ると、宗教を考える時、magic と呼ばれている事象を無視することも出来ず、そうかといって本来的な宗教という意識からすると、宗教の中にいることも出来ない、という彼等の事情を語っているように思われる。

結局、同様の事は、magico-religious という語そのものからも言えるのであって、magic という言葉は今もって残存しているのである。

このことの理由、背景は、ヨーロッパなどのキリスト教圏の精神史的背景と必然性が考えられ、ここで扱うには余りに大きな問題であり、今は我々の関心の在りかを明らかにするための以上の指摘にとどめておきたい。

さて、宗教と呪術の両者を、いわば純粹概念として、両極に据え、実際の現象はその中間の何処かにあるとする立場は、学説として提出されてもいるし、又、「宗教現象」の叙述に於て多く取られているところである。そしてこの立場は、先の図式の線上のものと考えられるのであって、その際、主体の意識に依る区分として、宗教は自己目的的とされ、呪術は手段的とされる。

そこでこの区分を、我々の関心から考えてみると、まず二つの問題点があげられる。

第一に、呪術と宗教の区分を以上のように規定すると、この理論に内在している論理からすると、現実の「宗教現象」は、宗教でありかつ呪術である、ということになるか、あるいは、宗教と呪術は、現象の二つの側面ないし要素ということになってしまうであろう。すると、現象そのものは、総体としては規定されていないことになる。

第二に、日本人の「宗教現象」をその対象とする場合には、この理論は相応しいものであるが、改めて問われねばならない。

我々としては、第二の問題の検討は、やがて第一の問題の考究への一つの道を開くことであると考えている。

以上のような関心の下に、みず子供養を取り上げたのであるが、もう一度そこに帰ることにしよう。

う。

(三) 試論的分析例 その二

先に(一)で、アンケートから抽出した幾つかの設問を〔I〕と〔II〕に分け、次の二つの区分とほぼ対応するとした。

α. みず子の「成仏」を願う供養そのものが目的である。

β. その他にも目的、動機がある。

このα、βの区分は、(二)で検討した、呪術と宗教の理論の枠組からすると、αはより宗教的であり、βはより呪術的ということになる。

α……宗教的……………〔I〕

β……呪術的……………〔II〕

そこで、αとβとの関係を問わねばならないが、原理上、αとβは共存はしていても、共により多いあるいはより少ない、ということは有り得ない。その意味では、αとβとは排他的であり、対立している。又、純粹概念としての両者の極は、互いに排他的であり両立しがたい。

以上のことは、理論の論理として考えられることである。

そして、(一)に於ける〔I〕と〔II〕は、以上のような「立場」から、仮に分類されたのである。

ところが、先にみたように〔a〕に於ては、〔I〕の系列(α)と〔II〕の系列(β)は、より対立的というより、より共存的であって、〔a〕の両者は、全体〔A〕より高いパーセンテージで共存している。さらに、〔a〕に於ては、対立は余り意識されていないように見受けられ、ひいては全体〔A〕の傾向としても、その方向にあると考えて良いであろう。アンケートの2の〔4〕の5、「何か困ったことがあると、みず子に相談したり、頼んだりする。」が、558名中76名いるということ、又、みず子に自分を守ってもらいたいと書く人がかなり多く見られることなども、以上の点を考える上で参考になることである。

以上は、極く大雑把な概観でしかないが、みず

子供養において、「宗教的」要素と、「呪術的」要素が、共に高いパーセンテージで共存し、必ずしも互に排他的でない、という点はいくらも見られたのではないかと考えられる。

すると、この例は、先に取りあげた宗教と呪術の理論からすると、不合理な例となってしまうであろう。つまり、この例は、先の理論では、十分には把握されないことになる。

(四) 終りに

従って、(二)の末尾であげた二つの問題は、その問題性をここでも示したことになる。

つまり、呪術理論は、理論としては、我々からすれば、どうしても破綻していると思えるを得ない所があるのである。——もちろん、みず子供養という特殊な例からの、ある傾向をそのまま一般化することは控えねばならないだけでなく、サンプル例としても十分とは言えないものであったことからすれば、ある結論をここで出すというには遙かに遠く、問題提起以上のものは考えられていない。——

一口に呪術と言っても、広範な領域にわたる人間の事象であり、その理論も多様であるが、呪術理論そのものを考えてみると、キリスト教圏をその出自としていることは、我々にとっても重要なことである。理論としては、比較的単純なものと言えようが、問題は、いわばその背後にある、つまり、彼等にとっての「宗教」と常に対比して(あからさまにではなくとも)考えられていること、又、何故 magic をかくまで彼等が問題とするのか、というよりせざるを得ないのか、ということ等が、肝要なのである。すると、問題は単なる呪術理論を越えた領域にまで広がることになる。

従って、ここで検討した「呪術」そのものも、もっと広範な領域で考えられねばならないし、特に「呪術」的意識ということを検討する必要がある。この意識という問題水準では、先にあげた第一の問題も、いわば「宗教」的意識と「呪術」的意識の両者の根底にあるものが、現象の基底と

して追求されなければならない、と考える。そして、その「宗教」が、多くいわば「宗教的エリート」の立場からと言わざるを得ないところがあること等からも、それらに対する一つの問題提起の試みとして、みず子供養の事例を考えてみることも意味があろうかと思われるのである。

註

- 1) Malinowski, "Magic, Science and Religion", Anchor Books, p. 88.
- 2) Lucy Mair, "An Introduction to Social Anthropology" 2 ed., Oxford, 1980, p. 229.

- 3) Malinowski, "Argonauts of the Western Pacific", Routledge & Kegan Paul, p. 400 f.
- 4) Hegel, "Vorlesungen über die Philosophie der Religion", Philosophische Bibliothek 59, Felix Meiner, S. 78.
- 5) ibd, S. 80.
- 6) ibd, S. 78.
- 7) John Beattie, "Other Cultures", Routledge & Kegan Paul, 1982, p. 212.
- 8) ibd, p. 212.
- 9) Hegel, S. 81.
- 10) ibd, S. 85.